

平安京左京八条二坊三町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一

平安京左京八条二坊三町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条二坊三町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび施設新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条二坊三町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区大宮通八条上る三丁目東側垣ヶ内町 248
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榊本頼兼
- 4 調査期間 2006年7月24日～2006年8月23日
- 5 調査面積 48.3 m² (A 1区：14.3 m²、A 2区：13.5 m²、B区：20.5 m²)
- 6 調査担当者 モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1：2,500)「島原」「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 A 1区・A 2区・B区に分け、区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、挿図・図版番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部について調査担当者が撮影した。
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 モンペティ恭代
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	4
(1) 層序と遺構の概要	4
(2) 遺構	4
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 瓦類	13
(4) その他の遺物	14
5. ま と め	15

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	A 1区全景（東から）
		2	A 2区全景（東から）
図版 2	遺構	1	B区第1面全景（北から）
		2	B区第2面全景（南から）
図版 3	遺物	出土遺物 1	
図版 4	遺物	出土遺物 2	

挿 図 目 次

図 1	調査位置図および周辺調査（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：400）	2
図 3	調査前全景（東から）	3

図4	作業風景（南西から）	3
図5	A1区埋納土壙2実測図（1：10）	4
図6	A1区・A2区平面図（1：50）	5
図7	A1区・A2区断面図（1：50）	6
図8	B区平面図（1：50）	7
図9	B区断面図（1：50）	8
図10	B区東壁断面図（1：40）	9
図11	B区埋納土壙1胞衣壺出土状況	9
図12	平安時代の土器実測図（1：4）	11
図13	A2区柱穴7出土土器実測図（1：4）	11
図14	出土土器実測図（1：4）	12
図15	出土瓦拓影・実測図（1：4）	14
図16	出土土製品実測図（1：4）	14
図17	出土石製品実測図（1：4）	14
図18	出土鋳型実測図（1：4）	15

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	3
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	11

平安京左京八条二坊三町跡

1. 調査経過

本調査は、京都市立下京中学校施設新築工事に伴う発掘調査であり、京都市より委託を受け、京都市文化財保護課の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地は塩小路通大宮の南東、現京都市立梅逕中学校敷地内の校舎北側に位置する。平安京の条坊では左京八条二坊三町にあたる。調査区の北端には八条坊門小路の推定南築地ラインが通る。発掘調査は八条坊門小路南築地および内溝の検出を主な目的として、2006年7月24日より開始した。調査対象地内には既存の埋設管（上・下水道管）、自治会館、受水槽、変電設備、記念樹などが存在するため、それらを避け、また排土を場内処理する関係からA1区、A2区、B区の3調査区に分けた。さらに、八条坊門小路南築地推定ラインまで、調査区の一部を拡張した。各調査区では、重機掘削後、精査し写真撮影や図面実測などの記録作業を行いながら調査を進め、8月23日にすべての作業を終了した。

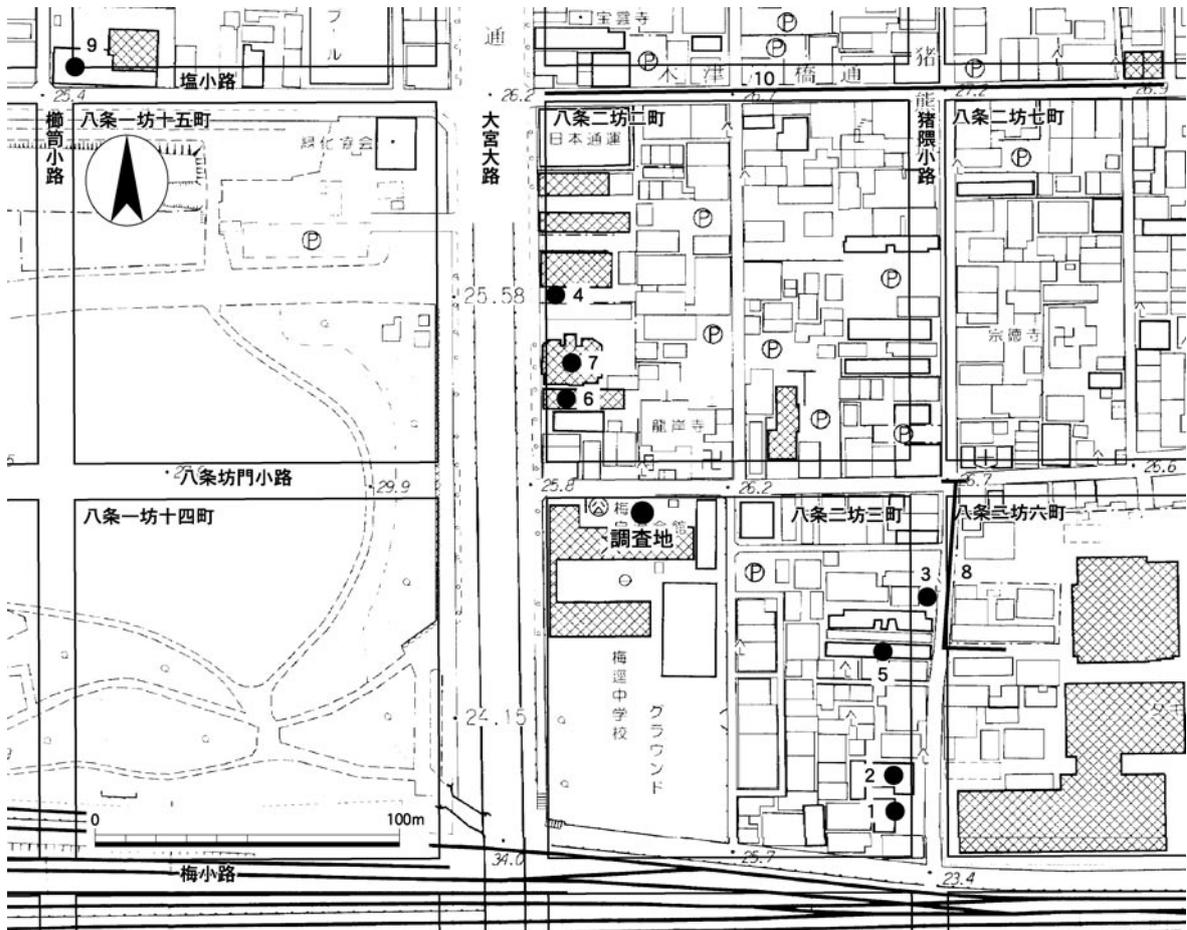


図1 調査位置図および周辺調査 (1 : 2,500)

2. 位置と環境

本調査地は平安京左京八条二坊三町に相当し、北方には公設市として栄えた東市があった。東市は平安時代後期に衰退していくが、次にそれに代わって七条大路と町小路を中心に七条町が形成される。七条町は商工業域として周辺に広がっていた。平安時代末期には調査地から大宮大路を挟んだ西側、左京八条一坊五・六・十一～十四町に平清盛の邸宅となった西八条第などがあった。当調査地の東方、左京八条三坊十三町には、平安時代後期に八条院暲子内親王の御所が造営された。八条院没後にはいわゆる八条院町が形成され、室町時代には東寺に寄進されてさまざまな職人の住む町として発展した。天正十九年（1591）には本願寺が移転させられ、七条通北側あたりまで寺内町が形成される。その頃から下魚棚通以南に七条出屋敷と呼ばれる町ができるが、寺内町建設に伴って移転させられた町ではないかとも考えられている¹⁾。調査地から塩小路通を挟んだ北側にある浄土宗龍岸寺は元和三年（1617）僧三哲により開かれた。それまで八条坊門通と呼ばれた通名が三哲通とも呼ばれるようになった由縁である。17世紀中ばに著された「京雀」では、八条坊門通に関して「此筋も東は田畠にて町家なしほり川通のすゑを西へゆく町…この西は大宮通にて猶其西は町家なし…」と記されている。寛永十四年（1673）の洛中絵図では、八条坊門通の南側には「町屋」、その南側は「田」、周辺には「田畠」と記されている。ところで、この絵図には大宮大路の西側に流路が描かれている。この流路は堀川が大谷本願寺の北側で分岐され、本願寺の北を西へ流れ、大宮花屋町付近で南に折れ、大宮通と並行に南流し、東寺前からお土居の濠に流れ込む。長年用水路として使われ、周辺の田畑を潤していたらしく、近代まで地図にも記載されている²⁾。

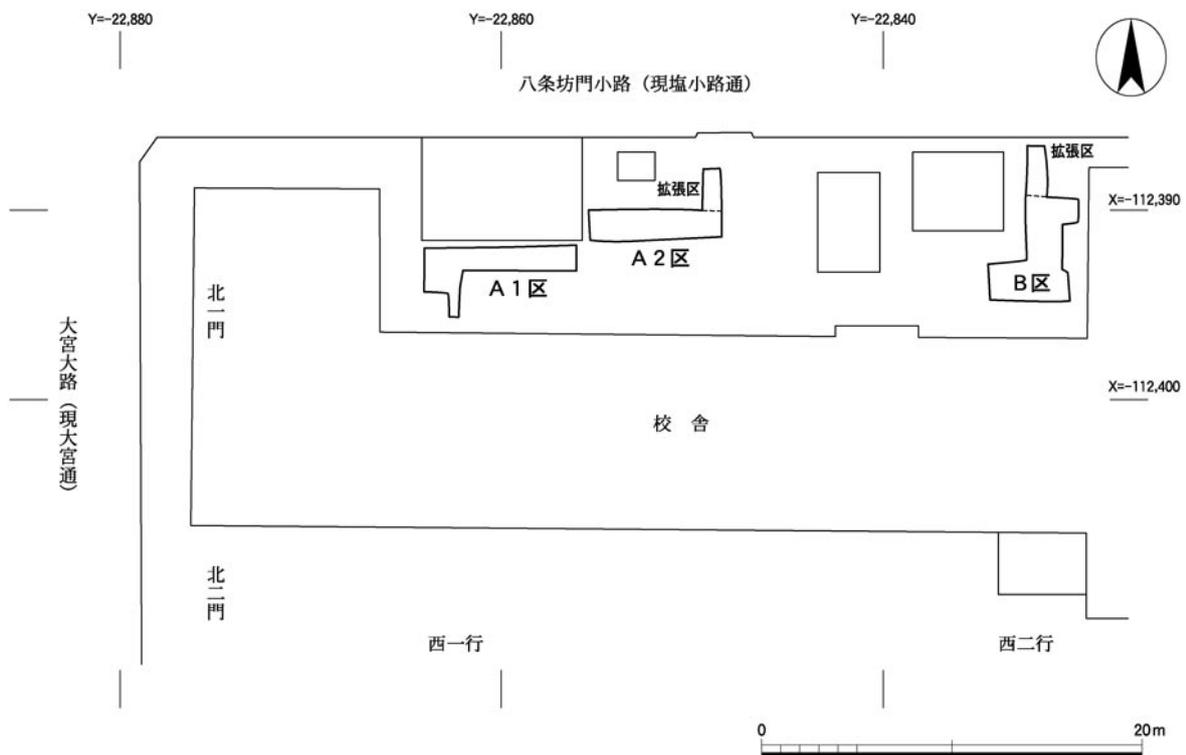


図2 調査区配置図（1：400）



図3 調査前全景（東から）



図4 作業風景（南西から）

明治2年（1869）、梅小路通古御旅町に梅逕中学校の前身である下京第廿三番組小学校が開校した。明治6年（1873）には「三哲通」に鉄道が敷設されることになり、用地に該当する民家が移転させられている³⁾。明治9年（1876）に鉄道が仮開業となり、三哲通大宮東入に仮ステーション（駅）が設けられた。この停車場は翌10年2月の京都～神戸間全通と七条停車場（京都駅）の開業に伴い廃止されるが、鉄道線路は大正2年（1913）に梅小路通南側に付け替えられるまで活用された。明治時代の地図では本調査地の東西に線路が走っている。この線路の廃線後、跡地は再び町地となるが、黒門通から大宮通間は梅逕小学校が大正9年（1920）に買収し、校地として整えられた⁴⁾。

本調査地の近辺では発掘調査事例は少ないが、継続的に立会調査が行われている（表1参照）。主な成果を挙げると、猪熊通塩小路下で、時期不明の猪隈小路の路面を4面検出、猪熊通梅小

表1 周辺の調査一覧表

番号	調査期間	方法	調査概要	文献
1	1982.2.3	立会	平安時代後期の土壌16基、鎌倉時代後期の土壌7基、室町時代前期の土壌4基、江戸時代以降の土壌5基、時期不明の土壌1基検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局
2	1982.5.10～5.12	立会	GL-1.2mで平安時代～室町時代の土壌を多数検出。土師器、緑釉、銅銭など出土。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局
3	1986.6.6	立会	GL-0.5m以下、時期不明の路面4面を検出、推定猪隈小路。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局
4	1989.10.5	立会	GL-0.5mで江戸時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局
5	1992.8.27～9.7	立会	GL-1.1m以下、平安時代前期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度 京都市文化観光局
6	1994.7.26～7.27	立会	GL-1.2m以下、流れ堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度 京都市文化観光局
7	1996.10.1～10.3	立会	GL-0.65mで平安時代末期～鎌倉時代の土壌群を検出。-1.4m以下、灰色砂礫の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 京都市文化市民局
8	2001.10.19～11.8	立会	GL-0.75mで時期不明の路面、-0.8mで鎌倉時代後期の路面を検出、推定猪隈小路。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度 京都市文化市民局
9	2003.2.12～3.28	発掘	平安時代後期から室町時代の井戸、柱穴、土壌、塩小路側溝、櫛筒小路側溝を検出。	『平安京跡発掘調査報告 平安京左京八条一坊十六町』2004年 関西文化財調査会
10	2005.4.15～5.24	立会	平安時代の包含層、時期不明の路面を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告』平成17年度 京都市文化市民局

路で、平安時代後期の土壙群、鎌倉時代後期の土壙群、室町時代後期の土壙群などを検出している。発掘調査は、関西文化財調査会が左京八条一坊十六町を調査し、平安時代後期から室町時代の塩小路・櫛笥小路側溝を検出している。以上のことから、本調査地では条坊に関連する遺構や平安時代から室町時代に至る遺構の存在が予想された。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

調査地の現状は近代から現代の盛土のため平坦となっており、現地表の標高は 25.70 m 前後である。基本層序は、A 1 区南壁にみられるように、現・近代の盛土が約 0.8 m、江戸時代後期の遺構面である黒褐色砂泥層が 0.2 ~ 0.3 m、江戸時代中期の遺物を含む暗褐色砂泥層が約 0.2 m、江戸時代初期の耕作土層である暗オリーブ褐色砂泥層が約 0.3 m、湿地状堆積をなす黒褐色粘質土層が約 0.1 m、最下層は黒褐色砂礫層の順である。黒褐色粘質土層には平安時代から江戸時代初期までの遺物が含まれている。最下層には遺物が含まれず、地山と思われる。検出した遺構は、土壙、溝、礫面などがあり、江戸時代後期から幕末にかけての遺構が中心である。

(2) 遺構

A 1 区

土壙 1 東西 1.1 m、南北 0.5 m 以上、深さ 0.9 m 以上の垂直に掘り込まれた土壙。埋土は 3 層に分かれ、上・中層は近代の遺物や塵芥を多く含む土、下層にはオリーブ褐色の精良な細砂であつた。

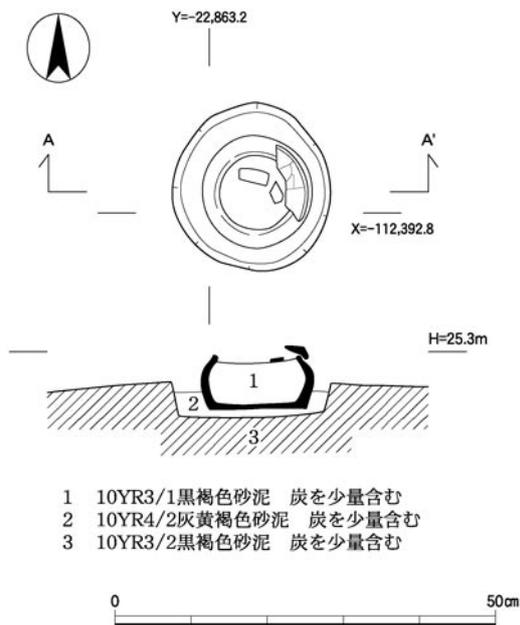


図5 A 1区埋納土壙2実測図(1:10)

調査区の幅が狭く、これ以上掘り下げることができなかったが、形状や土層の状況から近代の井戸の可能性が高い。

埋納土壙 2 (図 5) 調査区西部で検出した。平面形は南北 0.22 m、東西 0.21 m の円形で、深さ約 0.1 m である。中央に土師質の胞衣壺が据えられていた。

土壙 3 東西 2.2 m、南北 0.8 m 以上、深さ 1.2 m の江戸時代後期から幕末の廃棄土壙とみられる。上層には鋳型・埴塼の破片、焼土を多く含み、下層には 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての日常雑器を多く含む。

A 2 区

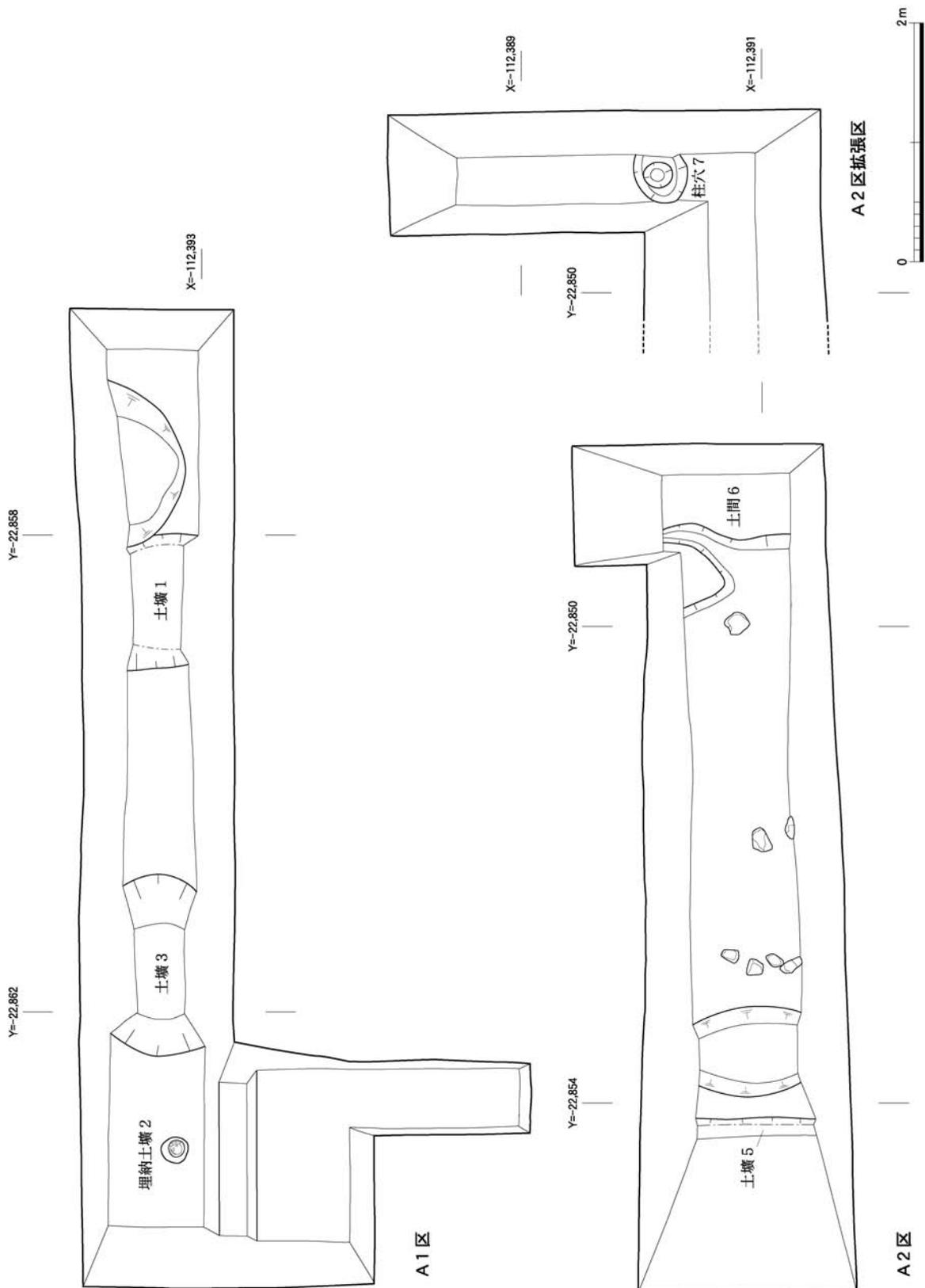


图6 A1区·A2区平面图(1:50)

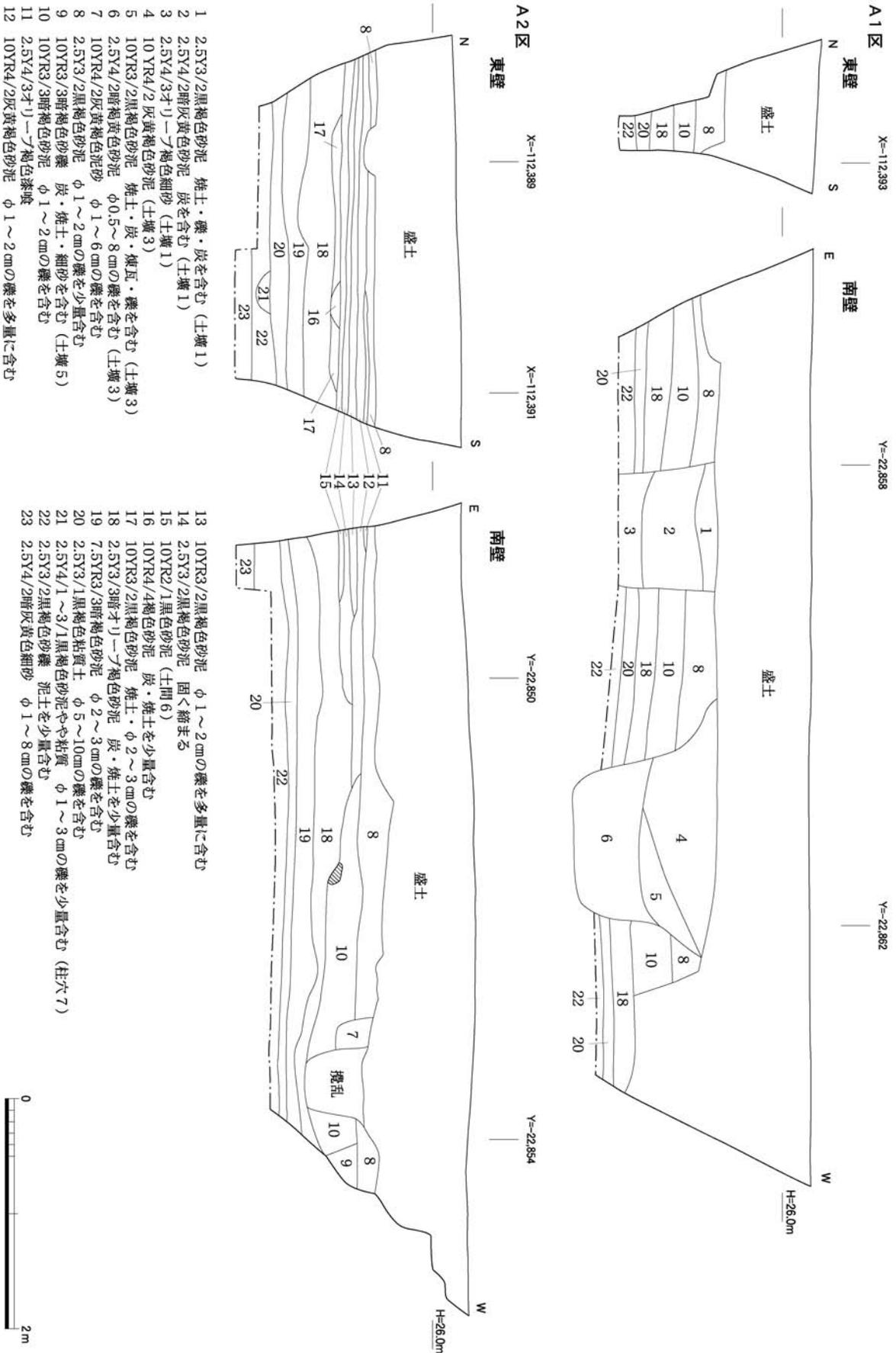


図7 A1区・A2区断面図(1:50)

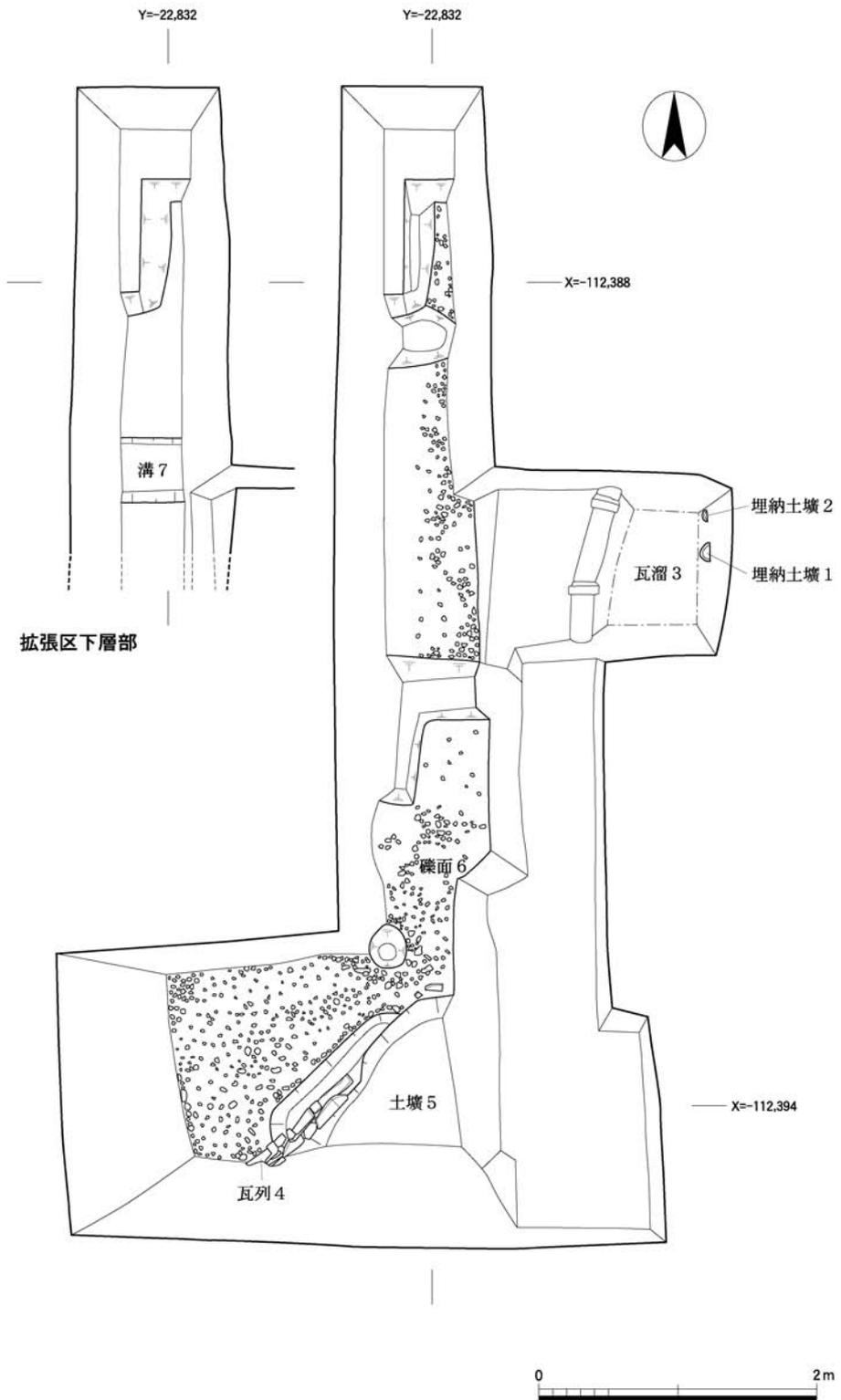


図8 B区平面図(1:50)

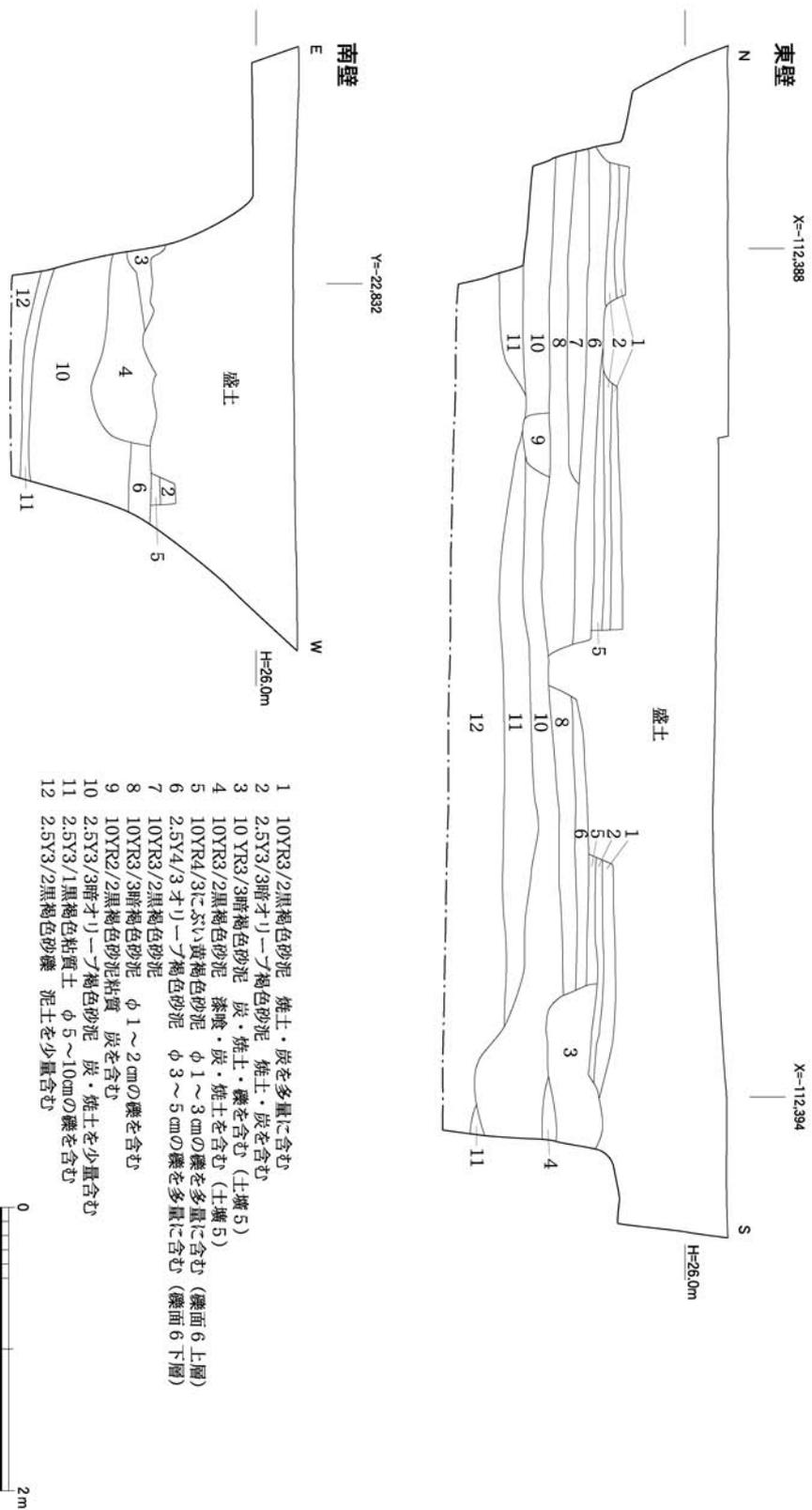


図9 B区断面図(1:50)

土壌5 西端で検出した江戸時代後期の土壌。南北 1.0 m、壁断面での深さ約 0.3 m である。細砂や礫を多量に含み、遺物は 18 世紀中頃から後半のもので磨滅しているものが多い。

土間6 東端で検出した江戸時代中期の土間。黒色～黒褐色砂泥が幾層にも叩き締められ、土間の様相を示している。土間が途切れた西側では、礎石と思われる 18～20 cm の河原石を 1.8 m 間隔で 2 個検出した。この部分が床貼りのある室内になると考えられる。

柱穴7 八条坊門小路内溝推定ラインまで東西幅 1 m で北へ 2 m 拡張したところ、柱穴を検出した。掘形は円形で径 0.4 m、深さ 0.27 m である。柱あたり埋土から 16 世紀末の土師器皿が出土した。平安京条坊に関連する遺構は検出できなかった。

B 区

埋納土壌 1 (図 11) 調査区北部東壁際で検出した。壁断面であったため、平面形は不明である。断面での掘形の幅は 0.18 m、深さは 0.19 m である。中央に土師質の胞衣壺が据えられていた。江戸時代後期から幕末の瓦溜 3 の上部に位置する。埋土は黒褐色砂泥、炭細片・焼土を少量含む。

埋納土壌 2 東壁際で、埋納土壌 1 から 0.3 m 北で検出した。壁断面であったため平面形は不明である。断面での掘形の深さは 0.15 m である。土師質の胞衣壺が据えられていた。瓦溜 3 の上部に位置する。埋土は黒褐色泥土、炭片・焼土を多く含む。層位からみて埋納土壌 1 に先行する。

瓦溜 3 調査区北東部で検出した。東西 0.6 m 以上、南北 0.8 m 以上、深さ 0.3 m 以上である。18 世紀後半から 19 世紀前半とみられる棧瓦が大量に投棄されていた。

瓦列 4 調査区南部、土壌 5 と礫面 6 の境界で検出した。礫面 6 上層を掘り込んで道具瓦を北東から南東方向へ並べ漆喰で固める。

土壌 5 調査区南東部で検出した。東西 1.4 m 以上、南北 1.5 m 以上、深さ 0.4 m である。18 世紀中頃から 19 世紀初頭にかけての遺物を多く含む。

礫面 6 上層 南北 7 m、東西 0.2～2.0 m で調査

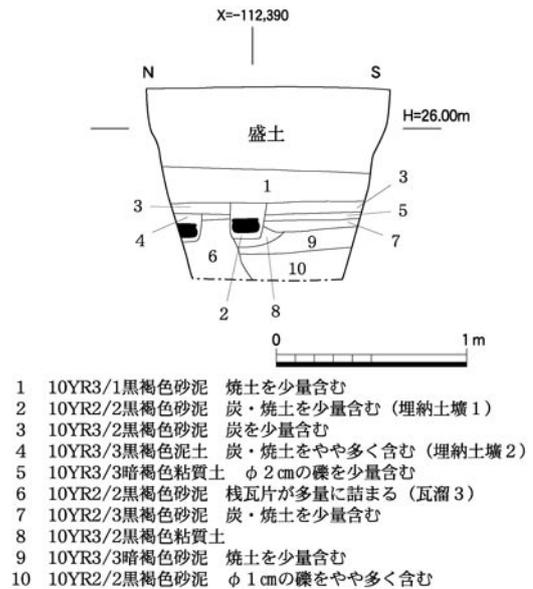


図 10 B 区東壁断面図 (1 : 40)



図 11 B 区埋納土壌 1 胞衣壺出土状況

表2 遺構概要表

時 代	遺 構		
	A 1 区	A 2 区	B 区
安土桃山時代末期		柱穴 7	
江戸時代前期			溝 7
江戸時代中期		土間 6、礎石、土壇 5	礫面 6
江戸時代後期～幕末	土壇 3		土壇 5、瓦列 4、瓦溜 3
近 代	土壇 1、埋納土壇 2		埋納土壇 1・2

区のほぼ全面で検出した。厚さ 4～8 cm で、径 3～5 cm の礫を密に敷きつめる。遺物は小片で復元することはできなかったが 18 世紀中頃の土器・陶磁器類である。

礫面 6 下層 調査区のほぼ全面で検出した。厚さ 10～15 cm で上面には径 2～3 cm の礫を密に敷きつめる。遺物は土器・陶磁器類の小片で、18 世紀前半である。

溝 7 八条坊門小路南築地推定ラインまで東西幅 1 m で北へ 2 m 拡張したところ、江戸時代初期の耕作土を切る溝を検出した。幅 0.45 m、深さ 0.2 m の東西溝である。埋土から 17 世紀前半の遺物が出土した。

他には遺構は検出できなかった。断面からみると地山の直上には、平安時代から江戸時代初期の遺物を含む黒褐色粘質土がある。湿地状堆積の様相を示す。また築地推定ラインには学校設備(避雷針)により深く攪乱を受けていた。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物の時代は、平安時代から明治初頭に及ぶが、表 3 に示したように江戸時代のものが大半を占めている。器種別には土器・陶磁器類の出土量が最も多く、鋳型・埴塙・鉄滓などの鋳造関係品がこれに次ぐ。他には瓦類、土製品、石製品、銭貨などがある。平安時代の遺物は、わずかに緑釉陶器、灰釉陶器、布目瓦の小片で、同時代の遺構に伴って出土したのではなく、後世の土層に混入した形での出土であった。

(2) 土器類

平安時代の土器 (1・2) (図 12) (1) は緑釉陶器皿の小片である。B 区黒褐色粘質土層から出土した。復元底部は 7.8 cm である。(2) は灰釉陶器皿の小片である。B 区暗褐色砂泥層から出土した。復元底部は 8.8 cm である。1・2 共に 9 世紀後半、東海系の製品である。

A 2 区柱穴 7 (3) (図 13、図版 3) (3) は A 2 区拡張区柱穴 7 の柱あたり埋土から出土した

土師器皿である。口径 10.0 cm、器高 2.1 cm。器壁はやや厚めで口縁部は丸味をおびる。外面はナデ仕上げしておらず、端部から内面だけをナデで仕上げる。16 世紀末から 17 世紀初頭に属する。

A 1 区土壌 3 (4~15) (図 14、図版 3) 棧瓦、埴埴や鑄型の破片、砥石、土製品、漆喰と共に土器、陶器、磁器が出土した。土器には土師質土器小壺いわゆるつぼつぼ (4) が完形で出土した。手捏ねで内面はへら状のもので削り、外面は指で押さえて仕上げている。陶磁器類では (5) は在地系の炆器質の土瓶である。胴径 13.1 cm、器高 9.6 cm、胎土は緻密で焼成は良好である。内・外面には指頭による整形痕が顕著に残る。上部外面には指頭痕と布目圧痕が規則的に並ぶ。底部外面には煤が付着する。(6・7) は万古焼と思われ⁵⁾る急須の蓋と身である。焼成は堅緻で、表面の色調はにぶい赤褐色を呈する。外面は梨子地状としているが、6 の蓋のツマミの先端には白泥をのせる。7 の片面には長方形の縁取りの中に羽ばたく鶴の文様を型押しする。把手は欠損する。(8・10) は京・信楽系陶器の土瓶の蓋である。白化粧の上に青釉、銹釉で草花文を描く。(9) は京・信楽系陶器の山水土瓶である。胴径 16.4 cm、器高 13.3 cm、白化粧の上に草花文を描く。底部は露胎で内湾し、煤が付着する。8 が蓋となる。(11) は灯明受皿である。受けの上端は皿部の縁よりもやや高い。受け部の切り込みは U 字形である。内面には鉄釉を掛けるが外面は露胎である。産地は不明である。(12) は京焼香炉である。口縁端部に耳が付く。外面には緑灰色の釉が施される。(13) はいわゆる薄手酒杯である。産地は不明である。口縁部外面に花唐草つなぎと推定できる文様があり、高台内に「亀亭精製」の銘がある。明治時代に入る。(14) は瀬戸・美濃系木型打込染付皿である。見込みに菊花文を陰刻し、その上にダミを施す。(15) は施釉陶器の播鉢である。高台部を除き鉄釉がかかる。底部内面には中心部から外周にかけて螺旋状に櫛目を密に施す。底部内・外面には重ね積みによる目痕が輪状に残る。

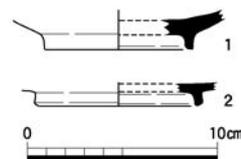


図 12 平安時代の土器実測図 (1 : 4)

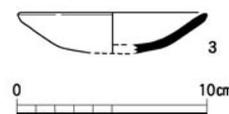


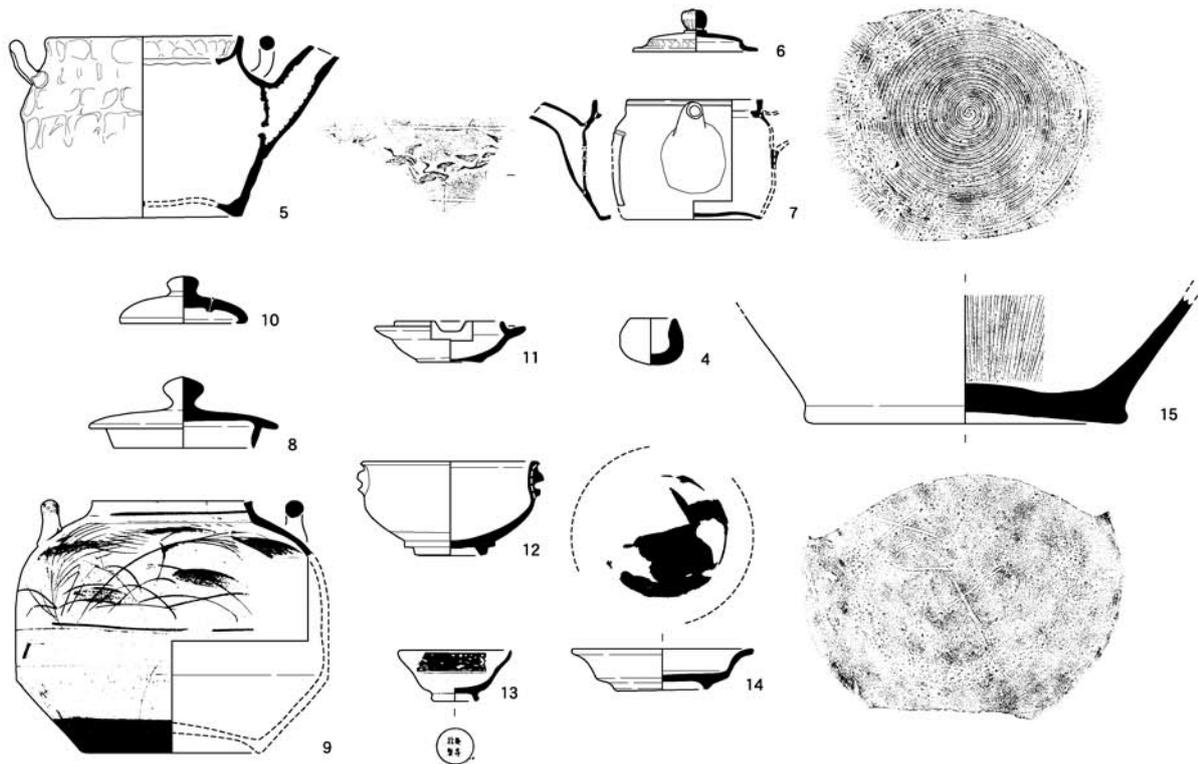
図 13 A 2 区柱穴 7 出土土器実測図 (1 : 4)

表 3 遺物概要表

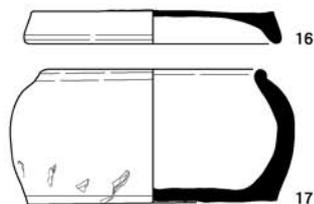
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	緑釉陶器、灰釉陶器		緑釉陶器 1 点、灰釉陶器 1 点		
安土桃山時代末期	土師器		土師器 1 点		
江戸時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、染付、瓦類、土製品、石製品、銭貨	27箱	土師器 4 点、土師質土器 2 点、施釉陶器 6 点、焼締陶器 3 点、磁器 1 点、染付 6 点、瓦類 3 点、土製品 5 点、石製品 1 点、鑄型 6 点	1 箱	24箱
幕末~近代	土師質土器、施釉陶器、埴埴、鑄型、鉄滓	1 箱	土師質土器 6 点、鑄型 6 点、墨 1 点、植物茎状製品 3 点		
合計		28箱	50点 (3箱)	1 箱	24箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より 3箱多くなっている。

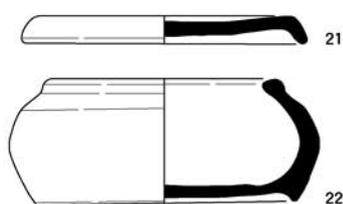
A 1 区土坑 3



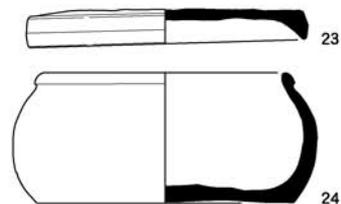
A 1 区埋納土坑 2



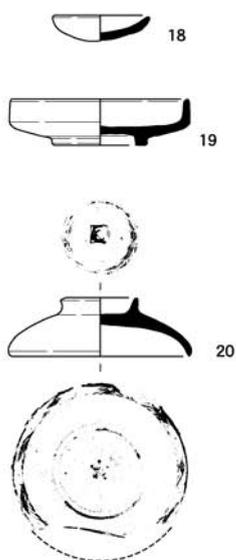
B 区埋納土坑 1



B 区埋納土坑 2



A 2 区土坑 5



B 区土坑 5

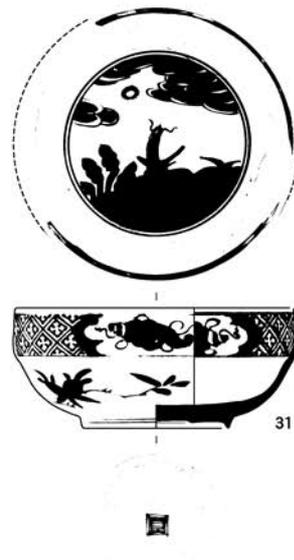
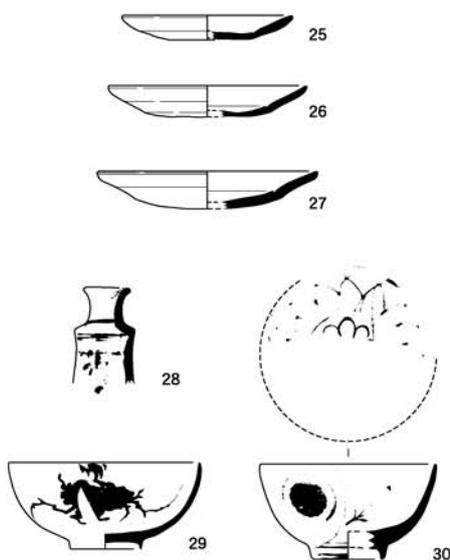


图 14 出土土器实测图 (1 : 4)

底部外面には「さす」と読める線刻がある。その特徴から丹波産である。4～12・14は19世紀中頃、13は19世紀後半、15は18世紀末の土器、陶磁器である。

A 1区埋納土壙2 (16・17) (図14) (16・17) は土師質胞衣壺の蓋と身である。体部には内外面とも丁寧なナデを施す。17には立ち上り部に粘土ひも接着時の圧痕が残る。内容物は残存していなかった。容量は684 ccである。

A 2区土壙5 (18～20) (図14、図版3) (18) は在地系土師器小皿である。口径5.1 cm、器高1.4 cmの手捏ね成形で指頭による整形痕が残る。(19)は京焼稜皿である。高台内および高台周囲を除き、淡緑灰色の釉を施す。見込みに銹絵の痕跡がわずかに残る。高台部と見込み部に白化粧がこびりつく。素焼き時のひび割れを上焼き時に白泥で埋めたものである。(20)は肥前青磁染付の蓋である。外面にオリーブ灰色の釉、内面および高台内部は明緑灰色の染付で装飾する。即ち内面の口縁部には四方禪文、中央に五弁花文のコンニャク印判で、高台内には角に渦福の銘がある。18～20はいずれも18世紀中頃から後半の土器、陶磁器である。

B区埋納土壙1 (21・22・47～50) (図14、図版3) (21・22) は土師質胞衣壺の蓋と身である。(22)の体部には外面に丁寧なナデ、内面も底部中央4 cmを残しナデを施す。内容物には、縦9.4 cm、横2.5 cm、厚さ1.2 cmの墨(47)と、長さ7.2 cm、幅0.7 cmの植物の茎状のもの3本(48～50)が残存していた。容量は699 ccである。

B区埋納土壙2 (23・24) (図14) (23・24) は土師質胞衣壺の蓋と身である。(24)の体部には外面は丁寧なナデ、内面も底部中央2 cmを残しナデを施す。内容物には、墨が残存していたがすでに形は崩れていた。容量は866 ccである。

B区土壙5 (25～31) (図14、図版3) (25～27) は土師器皿である。口径は9.0～11.6 cm、器高は1.3～2.0 cmに収まる。いずれも浅黄橙色を呈し、底部から立ち上りの変換点に細い凹線状圏線が巡る。口縁周囲から口縁端部にかけて細くなり、先は小さく丸く収める。(28)は染付仏花瓶である。口径2.5 cm、長さ2.0 cmの頸をもち体部は八角形で草花文を描く。産地は不明である。(29・30)は肥前染付碗である。29は薄手半球碗で体部外面に草花文を描く。30には体部外面には丸に菊花文のコンニャク印判と折れ松葉文が描かれ、体部内面には一重網目文、見込みには二重圏線とその内側には花卉文が描かれる。(31)は肥前染付鉢である。蛇ノ目凹型高台で丸く立ち上がり、体部中央より上端に稜を作る。体部外面には草花文、口縁端部には内外面ともに四方禪文に窓を4箇所開け宝尽文、見込みには青海波に龍と見える文様を描く。高台内には二重方形枠内に「筒江」の銘を入れる。この銘から有田の筒江窯で焼かれたことがわかる。25～28・31は18世紀末から19世紀初頭、29・30は18世紀中頃から後半の土器、陶磁器である。

(3) 瓦類 (図15)

瓦類はほとんどが江戸時代の棧瓦であった。二次的被熱で変色しているものもあった。(32)は左巻き巴文軒瓦である。復元直径は8.0 cmで軒棧瓦の一部である。A 2区土壙5から出土した。(33)は軒棧瓦の平瓦部である。文様は均整唐草文。中心飾りは逆ハート型。周縁上端は面取り。下端

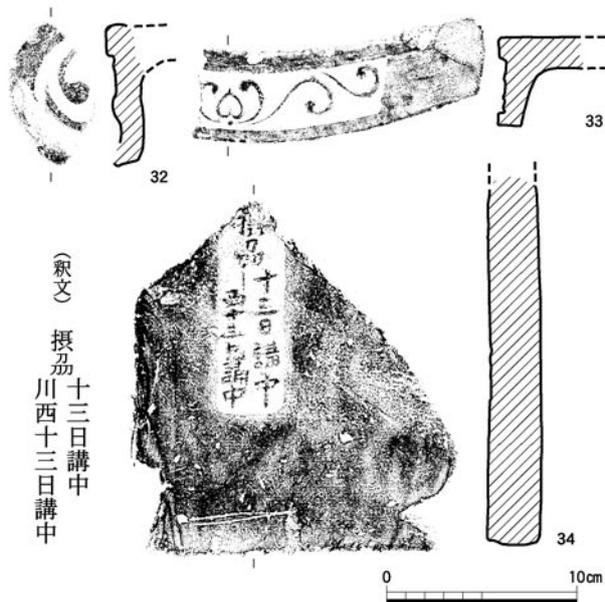


図15 出土瓦拓影・実測図（1：4）

はナデで丸く仕上げる。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ。平瓦部外面・側面はナデ、裏面は不調整。焼成は硬質である。(34)は平瓦の破片である。かなり磨滅している。外面に隅丸長方形の枠で囲って「撰州十三日講中川西十三日講中」と記す刻印がある。撰州十三日講は、江戸時代、真宗における門徒組織の中でも特に規模の大きい講の一つであった。本願寺史⁶⁾によると、宝暦年間の西本願寺阿弥陀堂再建に際し、撰州十三日講は宝暦二年（1752）には屋根瓦一式の寄進を申し出ており、川西十三日講は、宝暦九年（1759）に瓦師と立ち交って瓦葺を

担当している。また、宝暦十年の阿弥陀堂完成の後、寄進された瓦の余り分は、同年に行われた御影堂の修復にも利用されている。実際、本願寺御影堂平成大修復に伴う屋根瓦解体工事の際に、これと同様の刻印のある巴文軒丸瓦が見つかり、その軒丸瓦には「宝暦三^{癸酉}天從十一月始」の刻印銘もある⁷⁾。32・34はA2区土壇5から、33はB区土壇5から出土した。

（4）その他の遺物

土製品（35～39）（図16、図版4）（35）は泥面子である。直径3.0cm、厚さ1.0cmで、表面にはひらがなの「す」の字を文様化している。（36）は福助人形の面部分である。中空の型押しで成形される。目・鼻・口・耳だけでなく、額の皺、笑窪などが豊かに表現され、肌全面、髷、目、眉に彩色が施されている。（37）は芥子面である。指先に付けて指人形として遊ぶ。（38）は面模^{がた}である。土を入れて型を抜いて遊ぶ。この型では天神の形が出来上がる。35・37・38などの土製玩具類は19世紀前半に急激に増加し、19世紀中頃以降減少する。（39）は手捻りで作られた伏見人形である。胎土は淡黄色で、残存長9.5cm、最大底径5.1cmである。子供をおぶっている姿を表わすが大人も子供も頭部を欠く。35・36はA1区土壇3から、37・38はA2区土壇5から、

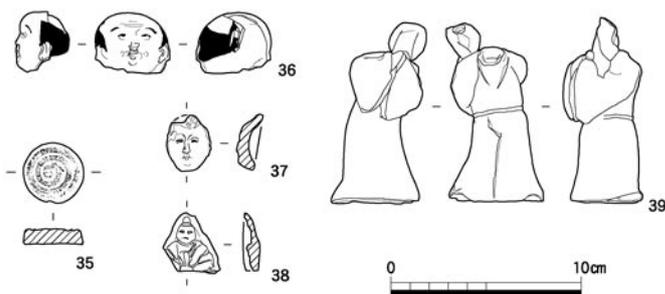


図16 出土土製品実測図（1：4）

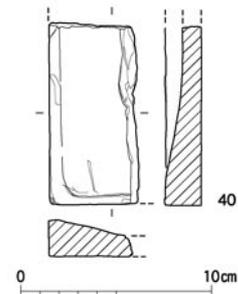


図17 出土石製品実測図（1：4）

39はB区土壙5から出土した。

石製品(40)(図17) 黒色珪質頁岩製の硯(40)がある。上部と右半部が欠損しているので大きさは不明であるが、最大厚は1.9cm、最小厚は1.0cmで墨池はかなり深く抉られている。硯背に銘などはなかった。A2区土壙5から出土した。

鋳型(41～46)(図18、図版4) 全調査区で近世から近代の遺構の埋土に坩堝や鋳型など鋳物関連の遺物が多量に混入する。(41)は凹面に真土が残る鋳型の破片である。小片のため器種は推定できない。

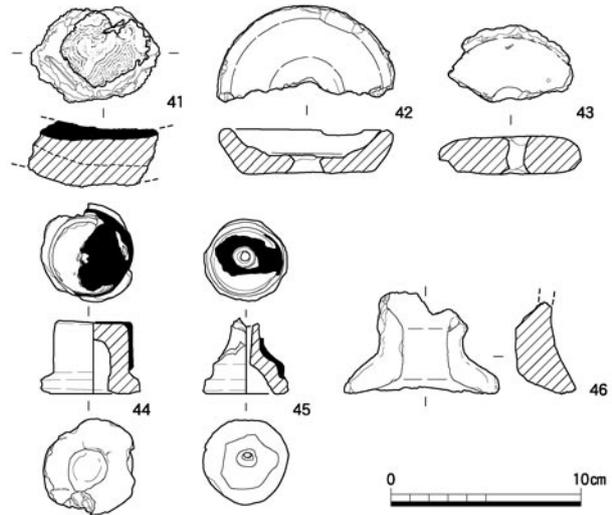


図18 出土鋳型実測図(1:4)

真土は粗型の上に直接重ねられており、厚さは4～8mm、表面に細かな文様がある。近代の攪乱層から出土した。(42)は皿状製品の外型、(43)は皿状製品の内型である。両者とも真土ははがれ落ちたのか、残っていない。(44)は円筒状製品、(45)は仏飯器の内型で、両者とも凸面に真土が残る。真土は比較的均一で厚さ1～2mmで、表面に文様はない。粗型の胎土は粒子が細かく、砂粒と籾殻が少量混じる。(46)は仏飯器の外型である。真土は残らない。粗型の胎土は砂粒と籾殻が多量に混入した土で作られている。

銭貨 銭貨は合計10枚出土した。寛永通寶が5枚、皇宋通寶が2枚、聖宋通寶・祥符通寶・元豊通寶が各1枚である。渡来銭に関しては、いずれも肉薄で小型化しており、16世紀後半から17世紀前半に盛んに作られた模鑄銭の可能性はある。

5. まとめ

調査の結果、江戸時代から幕末の土壙、礫面、土間、および安土桃山時代末期の柱穴を検出することができた。期待された平安京条坊(八条坊門小路)に関連する遺構については推定ラインまで調査区を北へ拡張したが、検出できなかった。

A2区において検出した土間6や礎石は、江戸時代の町屋に関わる遺構と考えられる。B区で検出した2面に分けることのできる礫面6は江戸時代の路面で、八条坊門通(三哲通)から南へ入る路地と考えられる。瓦列4は土壙5と礫面6を区切っており、敷地境であろう。狭小な調査区にあって胞衣壺を埋納する土壙を3基検出できたことは特筆できる。江戸時代から近代まで、胞衣壺は家屋の塀際や庭先、出入り口の下などに埋納されることが多く、このことから、付近が居住空間であったことを窺わせる。出土した土師質胞衣壺のうち、B区出土の2個体は蓋を閉めた状態で検出できた。収められていたであろう胞衣はなかったが「墨」および「植物の莖状製品」が残存していた。胞衣壺の容器内から墨・硯また針などが共伴する例はいくつか報告されているが、

今回の資料も胞衣埋納の習俗に関する好事例となるであろう。今後の資料の増加に期待される。

その他にも出土した遺物は 18 世紀から 19 世紀を中心としたもので、明治 6 年（1873）にこの地に鉄道が敷設される直前までの遺物が主体である。これらの遺物で特徴的なことは鋳型や埴塼が多いことである。特に A 1 区土壙 3 からは生活雑器とともにまとまって出土した。鋳型の形状から仏具関連の製品とみられ、東・西両本願寺に近い立地からみて本調査地近辺で仏具生産が行われていたものと推定できる。しかし、鋳造に関連する遺構は検出できなかった。

西本願寺と関係の深い摂州十三日講の刻印のある瓦が出土したことは、この宅地が七条出屋敷⁸⁾と何らかの関連があることを示唆している。

江戸時代以前の遺構は 16 世紀末の土師器を埋土に含む柱穴を 1 基検出したにすぎず、期待された条坊遺構は検出できなかった。ただ、平安時代後期の土師器や須恵器、瓦などの小片が出土していることから、当概期の遺構が存在したとみられる。

註

- 1) 『史料京都の歴史』第 12 巻 下京区 平凡社 1994 年
- 2) この流路については、『左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査』平安学園平安中・高等学校 1986 年 で詳しく検証されている。
- 3) 前掲 1)
- 4) 『安寧校百年史梅逕小学校史併記』安寧校創立百周年記念事業実行会 1969 年
- 5) 「東京大学本郷構内の遺跡山下会館・御殿下記念館地点」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4』東京大学埋蔵文化財調査室 1990 年 御殿下記念館地点の調査 7 号遺構（明治時代）出土の万古焼急須と成形技法、形態が類似する。
- 6) 『本願寺史 第二巻』本願寺史料研究所編纂 浄土真宗本願寺派発行 1968 年
- 7) 「本願寺御影堂平成大修復推進事務局だより 18・57・64」『宗報』2001 年新年号・2004 年 7 月号・2005 年 3 月号 2001 年・2004 年・2005 年
- 8) 前掲 1) に、出屋敷の町々が西本願寺に毎年献上物を納め「御因縁有之」とされている、とある。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうにぼうさんちょうあと							
書名	平安京左京八条二坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-11							
編著者名	モンベティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうにぼうさんちょう 八条二坊三町 あと 跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 おおみやどおりはちじょうあが 大宮通八条上 るさんちょうめひがしがわ る三丁目東側 かきがうちちょう 垣ヶ内町248	26100		34度 59分 12秒	135度 44分 59秒	2006年7月 24日～2006 年8月23日	48.3m ²	施設新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 八条二坊三町 跡	都城跡	平安時代		緑釉陶器、灰釉陶器				
		安土桃山時代 末期	柱穴	土師器				
		江戸時代	溝、土間、礎石、 土壇、礫面	土師器、土師質土器、 施釉陶器、焼締陶器、 磁器、染付、瓦類、土 製品、石製品、銭貨				
		江戸時代後期 ～近代	土壇、瓦列、瓦溜、 埋納土壇	土師質土器、施釉陶器、 埴塼、鋳型、鉄滓				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-11
平安京左京八条二坊三町跡

発行日 2006年10月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961